

# 父の痛み

シリーズ ～十字架～

# 父なる神と子なる神

- 聖書は、イエス・キリストを**子なる神**と呼び、彼を遣わした**父なる神**との関係を強調している
  - 「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは**父の独り子**としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」 <ヨハネ福音書 1:14>

# 父・子の関係が語るもの

- 神は唯一であるが、人間に救いの奥義を啓示するために、父と子(さらに聖霊)なる神として働かれる
- 最も大切な独り子を与えるということにより、神がどれほど人間を大切に思っておられるかを示された
  - 「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」 <ヨハネ福音書 3:16>

# 父なる神の受難

- 私たちの罪をあがなうために
  - 子なる神は、人となり、十字架上で**肉体的な痛み**を受けられた
  - 父なる神は、独り子を送り、彼の苦しみを見つめると**心の痛み**を受けられた
- 十字架は父なる神にとっても受難である

# 父と子の関わり①

～誕生から洗礼まで～

- 父は子を人として地上に遣わされた
- 父は、子の誕生直後の危機を天使を送って回避された
- 父は子が洗礼を受けたとき祝福された
  - 「聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。すると、『**あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者**』という声が、天から聞こえた。」 <ルカ 3:22>

## 父と子の関わり②

### ～公生涯～

- 子は父を「アバ」と呼びかけて祈った
- 父も子の祈りに応え、奇跡を行われた
- 子は常に父の御心だけを行った
  - イエスは彼らに言われた。「はっきり言っておく。子は、父のなさることを見なければ、自分からは何事もできない。父がなさることはなんでも、子もそのとおりにする。 <ヨハネ5:19>

# 父と子の関わり③

## ～ドロローサ～

- 子は、ゲツセマネの園で、「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。」と三度祈られた
- 子が不当な裁判にかけられ、十字架刑が決定した時、父は黙って見ておられた
- 子が死ぬ寸前までむち打たれ、茨の冠をかぶせられ、重い十字架を背負ってゴルゴダの丘に向かって歩んだときも、父は黙って見ておられた

# 父と子の関わり④

## ～十字架～

- 子の手足に犬釘が打ち込まれ、全身に激痛が走っているときも、父は黙って見ておられた
- 子の十字架の下で、ローマの兵士たちがイエスの唯一の財産であった衣をくじ引きにしたとき、「父よ、彼らをお赦し下さい。自分が何をしているのか知らないのです。」と祈られたとき、その祈りを聞き入れ、怒りの剣を振り下ろされなかった
- 子に人類の全ての罪を背負わせ、「わが神、わが神、どうしてお見捨てになったのですか」と叫んだとき、父は黙って見ておられた



# なぜ神は痛まれるのか

- 神は人間に対して憐れみ深くあられるが、罪に対しては一切の妥協を認めない厳しい方である。
- 神の痛みは、絶対的な正しさと完全な愛とが十字架で激突した証である。
  - 「神は言うべからざる苦痛をなめ、痛ましき手続きを経、身を犠牲に供して、人のために赦罪の道を開きたり」(植村正久)

# 「父の涙」

①心にせまる 父の悲しみ 愛する独り子を  
十字架につけた 人の罪は 燃える火のよう  
愛を知らずに 今日も過ぎてゆく

十字架から あふれ流れる泉 それは 父の涙

十字架から あふれ流れる泉 それは イエスの愛

②父が静かに 見つめていたのは 愛する独り子の  
傷ついた姿 人の罪を その身に背負い  
「父よ、彼らを赦して欲しい」と

<岩淵まこと>